

三浦半島沿岸に生息していたニホンアシカについて

中 村 一 恵

(神奈川県立博物館)

A Note on the Japanese Sea Lion, *Zalophus californianus japonicus* (PETERS, 1866),
Living on the Coast of the Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture

Kazue NAKAMURA

(Laboratory of Zoology, Kanagawa Prefectural Museum, Naka-ku, Yokohama 231)

Abstract From published accounts of the Edo and Meiji periods, Japanese sea lions (*Zalophus californianus japonicus*) apparently once lived around the coast of Sagami and Tokyo Bays of the Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture. Sea lions of Ashika-jima (so called sea-lions rocks) in the Miura Peninsula might not been disturbed by the native people, while they have been hunted by guns at least 100 years since 1720 by the government officers from Edo. They may have finally disappeared until the end of Meiji period although the real cause of extinction is unknown.

は じ め に

アシカ島、アシカ根、アシカ箸（バエ）などと呼ばれる地点名が千葉県銚子から九州東岸にかけての太平洋沿岸に少なくとも36ヶ所ある。松浦清の『甲子夜話巻七十七』には「相州あしか嶋多し」（中村・中野，1980）とあるから，過去にアシカ島という地点名は相模湾沿岸および三浦半島の含まれる東京湾沿岸の一部の地域にいくつもあったと思われるが，現在の地図上に残されたものは少ない。横須賀市久里浜沖に残る，海獺島または海鹿島と書き，アシカ島またはアジカ島と呼ばれる地点名はその一つであり，三浦半島城ヶ島の長津呂湾はアシカガ入江とも呼ばれていた（内海，1960）。久里浜沖のアシカ島は宝島とも呼ばれ，魚介類が豊富であったばかりでなく，漁場を見通す山見の目標や避難場所としても利用されていた。加藤山寿の『三浦古尋録』（文化9（1812）年）には「浦賀湊入口ニ海驢島ト云有此島ニアシカ居一疋ハ番ヲナシ多皆イ子ムリ居故ニアシカ島ト云」と記述されている（菊地ほか，1967）。

36ヶ所のうち，14ヶ所が伊豆諸島沿岸から房総半島沿岸の銚子までに位置しているが，その多くがアシカ島またはアシカ根と呼称されている（付表参照）。こうした地点名は海中の礁を指し，魚族の集まる所とされ，また操船にあたっては警戒すべき礁であることを意味している（柳田・倉田，1938）。アシカ類に因む地点名の呼称が，静岡県御前崎から伊豆諸島にかけてはアシカ根であるが，四国，九州方面ではそれがアシカ箸（バエ）となり，日本海でトド礁（グリ）となるのは，地域による礁の呼称の変化に対応したものである。これらの岩礁の呼称の由来は，それを発見した者の名が付けられる場合もあったようであるし，その地形や島の形，位置などさまざまである。暗礁とは言っても，潮の干満によっては水面に露出することになるものもあるから，海鳥や海獣の休息の場として利用される。鵜の根や鵜ノ箸のような名称は，海鳥の鵜がよく集まることで名付けられたものであろうし，アシカ根，アシカ箸などの呼

称も、そうした礁にアシカが生息していたからこそ名付けられたものである。

先に中村(1989)は、伊豆諸島に生息していたニホンアシカ *Zalophus californianus japonicus* について報告した。しかしニホンアシカ(以下アシカ)は、生物学的な調査がほとんどなされないまま消息を断って今日に至っており、絶滅したものと思われるが、江戸時代や明治時代の文書あるいは民俗資料として残された記録から生態、分布、人との関係等について若干の手がかりを得ることが可能である。筆者が目を通すことのできた資料は乏しいものであるが、それら資料から三浦半島沿岸に生息していたアシカのたどった歴史を多少なりとも復元してみたいと思う。

民俗研究家の内海(1960)が、その著書『海鳥のなげき―漁と魚の風土記―』の中に残されたアシカに関する資料などは、断片的なものではあるが今となってはきわめて貴重である。そうした記録を統合・考察し、先報の補遺としたい。

相模湾および東京湾に生息していたアシカの消滅までの過程

久里浜沖のアシカ島については、『相州三浦郡東浦賀村文書』所載の海馬嶋関係文書(本橋, 1987)に、より具体性のある記録を見ることができる。村明細帳とは、領主の命令によって村の概況について全般的に報告した書類で、現在の村政要覧、市政要覧と類似した性格をもつものである。

「海馬嶋と申候儀、夏向或ハ平生共ニ暖気成節ハ海馬大分右嶋江上り候而あそひ申候ニ付、海馬嶋と申候、又ほう嶋(宝島のこと、筆者註)共申候。獵舟など右嶋四五間近所江舟寄候而海馬迺不申候、但シ海馬形ハ犬之様成ものにて、毛悉短ク、頭より段々尻之方肉深ク相見江申候、ひれの肉ニ水かき有之候哉、ひれニ而歩ミ申様ニ相見江申候、毛色ハ黒ねずミ色も有之、多ハうす赤キ方ニ而御座候事」。

海馬島に生息していた海馬(アシカ、註1)の形態上の特徴が要領よく記述されているが、中でも、「四五間近所江舟寄候而海馬迺不申候」という表現は注目し値する。「海馬迺不」とは「逃げ申さず」の意味で、「四五間近所江舟寄候」とあるから、島までの距離 10m ほどまで漁師が船を寄せても、アシカが逃げることはなかったと記述されている。

浦賀奉行所は江戸幕府職制上の要職として、その直轄の要地に置かれた遠国奉行所の一つで、それが西浦賀村に建設され、業務が開始されたのは享保6年のことである。前年の5月頃から12月にかけて幕府関係者による当地の見分が行なわれているが、前記の文書は、その際、海馬島に関する代官の質問に答えたものである。年代は享保5年(1720)12月となっている(鈴木, 1987)。そして以来、浦賀村の村民がアシカの捕獲に協力を要請されていた記録が、加茂元善の『浦賀志録』に収録されている。石渡(1987)によれば、『相模國三浦郡西浦賀村明細帳』に記載された文化10年(1813)の文書である。

「当村沖合あしか島ニ平生海鹿上陸致居候ニ付享保五子年ヨリ田村四郎兵衛様御組御鉄砲御役人方毎年冬江戸ヨリ御越ニ相成り十四五日或ハ二十日程ヅ、当村御逗留あしか御打被成候而江戸へ被遣又風悪敷時分ハ村継ニ而陸ヲ被遣候間御献上被成候右御逗留中海鹿御見分之漁船其外江戸へ被遣候節海陸共御用浦賀ニ而相務メ尤モ木錢米錢ハ御払方被下候延享元年ヨリ右あしか御用御座ナク候其以後浦賀奉行ヨリ同心衆被仰付右島ニ而海鹿御打相成候節役船差出シ江戸へ被遣候海陸共右之御用浦賀ニ相勤メ来リ申候」。

享保5年(1720)の以降、冬になると江戸から幕府の役人がやって来て浦賀村に二週間ないし二十日間滞在し、銃によるアシカ狩が毎年行われ、延享元年(1744)以後は、浦賀奉行

所の下級武士である同心によってアシカ狩が行なわれていたことが記述されてある。

上記文書に見るような、アシカ狩に村民が駆りだされていたことは、享保18年(1733)から文政3年(1820)にかけて差出された『相模國三浦郡村明細帳』にも、以下のように記述されている(青山, 1973; 1990; 1991)。

「あしか御用二付御鉄炮衆御出被遊候節、人足漁船御用相勤申候」(享保18年)。「海獺御用二付、御鉄炮衆御出被遊候節、人足・漁船御用相勤申候」(文化8年)。「海鹿御用二付、鉄炮衆御出之節者、人足・漁船御用相勤申候」(文政3年)。

浦賀沖のアシカ島に生息していたアシカを狩猟の対象とするようになったのは、加茂元善の『浦賀志録』によれば、享保5年(1720)以降のことであるが、上記村明細帳には、少なくとも文政3年(1820)まで人足として村民が駆りだされ、かつ漁船を提供していたことが記述されている。間宮士信らの『新編相模國風土記稿』(天保12(1841)年)にも、同心らによる銃猟が行なわれたことが記述されてある。主に冬期に限って実施されていたようであるが、アシカ猟は100年以上にわたって行なわれていたことになろう。しかしどの程度の量の捕獲がなされたのか、これらに関する資料は得ていない。

所(1969)によれば、携帯用の火縄銃(6~10匁玉で銃身1m)の場合、人体ほどの大きさの標的に命中させるには、標的までの射程距離は約100m以内であり、それ以上の射程距離になれば、命中確度が低下するという。前記のように、アシカ島までの距離およそ10mまで漁船を寄せても、アシカが逃げることはなかったとあるから、当時の鉄砲の性能で確度高くアシカを捕捉できたものと推定される。

文化10年(1813)に久里村名主小川彦右衛門より奉行所代官に差出された海馬嶋関係文書(石渡, 1990)に次のような記述がある。

久里浜村之者共もあしか取到候哉御尋二御座候、漁師者海馬二手さし不仕候。海馬者執念深きもの二而仇を致候迎漁師共決而手さし不仕候右者御尋二付乍恐受奉申上候。

漁師が海馬(アシカ)に決して手を出すことはなかったこと、その理由としてアシカは執念深く仇を討つものだからと書かれている。海馬の殺生を忌避する民間信仰のあったことが伺える(cf. 中村, 1992b)。実弾使用は厳しく統制されながらも、17世紀前半期から同紀中期にかけて、全国的に在方百姓のもとに鉄砲は普及した(葉山, 1992)。が、当時の浦賀村民の鉄砲の所持・使用は厳しく制限されていた(註2)こと、また上記民間信仰から推論して、当時の村民がアシカを狩猟の対象としていた可能性は薄い。漁民が島近くに船を寄せても、アシカが逃げることはなかったという前記の海馬嶋関係文書の記述(本橋, 1987)とも整合するものであろう。幕府の役人が銃によりアシカ狩をしていたのとは対照的である。

アシカが明治以降衰退の一途をたどっていったことは、以下の村井弦齊の記述と照合して推定するならば、弦齊が浦賀及び付近を見聞した当時、すなわち明治中期の東京湾でアシカを見ることが、すでに難しい状況にあったのかもしれない。

明治25~26年代の記述と考えられている村井弦齊の『浦賀見聞記』には、「浦賀近海に鰯群集すれば、鯨、海獺(あしか)、海狗(いるか)の類、亦た鰯を追て来る鯨の内海に入るは富津を以て界とすれども、海獺、海狗は能く沿岸の小湾に入ることあり」と記述されている(石井, 1967)。村井弦齊は東京湾の海鹿島について、「余が常に漁船を促して垂綸の興を遣りし処なり」(石井, 1968)と書き、しばしば海鹿島を訪れたようにとれる。が、その中に実際にアシカが見られたことの記述は見当らない。内海(1960)によると、明治の中頃までは冬に

なると東京湾内までアシカが姿を見せていたということである。これを裏書きするように、東京国立博物館所蔵の『博物館写生図』には明治12年に三浦半島の三浦市南下浦町松輪の海岸で捕獲されたアシカの写生図が残されている（磯野，1992，註3）。

明治後期になると、東京湾のアシカ島にもはやアシカが見られなかったことが、加茂元善の『浦賀志録』の「第七節あしか島」から読み取ることができる。高橋（1972）によれば、『浦賀志録』は明治42年（1909）7月に完成したものである。加茂元善は、先の幕府の要人や浦賀奉行所の下級武士によるアシカ狩を紹介した後以下のように記し、アシカ島からアシカの姿が消えたことを嘆いている。

「仲々美観ヲ極メタル状況ニ見受ケラレルモ今日ハ更ニ何等形跡モナク空シク海中ノ二小島トシテ船舶ノ目標ニ充ツルニ過ギズトハ若シ島ニシテ靈アラバ昔日ヲ思フノ念ヲ慰ムル日ナカルベキナリ」。

文中「今日ハ更ニ何等形跡モナク」とあるのは、前記した前文の内容から、アシカが住んでいる形跡のないことを意味したものと思われる。

アシカによる漁業被害について

沿岸漁業の急激な発達が認められるのは江戸時代の中期から末期にかけてであり、その漁業技術は出揃い、それがそのまま明治期に持ち越された（二野瓶，1981）。江戸時代に伊豆大島ではアシカによる漁業被害が、起きていたことが記録されているが、以下に述べるようなアシカと漁民との利害関係は、そうした時代背景の中にある。

伊豆大島の泉津にアシカ島、波浮にアシカ根という地名が残されている（前者は今でも地図に記載されている）。幕臣野呂元丈の『大島見聞録』（享保9年）に「アシカ島とて岩の出たる有、アシカ多く群って見ゆ」とあるから、かつてはかなりの数のアシカが生息していたのであろう。この島の岡田で魚連（タカベ）網が行なわれていたが、寛永2年（1749）の『伊豆国大島差出帳』に、この漁の魚を食いにアシカが来て網を破るので、漁の妨げをするアシカを打つため江戸から伊豆大島に鉄砲が初めて導入されたという（坂口，1980）。

三浦半島三崎地区でも、アシカによる漁業への加害のあったことが内海（1960）に記録されている。それによると、明治16年（1883）に三崎町戸長役場から郡へ提出された報告書には次のような記述がある。

「海中ヲ潜泳魚類ヲ嚙食シ時アツテ島嶼ニ群居ス 羅網ノ魚類ヲ食シ釣ニ係ル魚類ヲ食シ去リ数頭海面ニ在ル時ハ漁夫終日ノ営業徒勞ニ陥ラシムル事アリ 漁夫捕殺シテ皆快トシ帰帆ノ酒ヲ購ヒ嗜ミ以テ漁業上ノ害ナキヲ悦フノ慣習タリ」。

アシカによる被害はその後も続いたようである。最も被害の大きかったのは冬が漁季であったムツ漁業で、内海は「アシカが船に付くと揚網の魚を次々と捕るため、漁を中止して帰る日もあった」という明治30年代の聞き取り調査の記録を残している。明治16年の報告書には「各漁業者競ヒテ駆除ス」とあるが、アシカを捕っても値段が安く、大きなのは鉞で突いても取るのに骨が折れ、ヤナを取られて株ジマイとなるのを恐れ、小さいものの外は捕ろうとはしなかったようだ」と内海は記している。

ま と め

三浦半島久里浜沖のアシカ島に二ホンアシカは少なくとも明治の中頃まで生息していたと考えられる。在方村民によるアシカの狩猟は行われていなかったと判断されたが、1720年以降、

幕府の役人によって銃による捕獲は100年以上にわたって行なわれていた。三浦半島の三崎地区には少なくとも明治30年代までは生息していたと考えられ、内海（1960）によれば、三崎地区では漁業被害を防除するためにアシカの駆除が行なわれていた。

先に、アシカは明治の中期から後期にかけて伊豆諸島およびその近海からほとんど姿を消したと結論した（中村，1991）。今回の東京湾および三浦半島のアシカに関する資料からも、それを改める材料とはならなかった。すなわち伊豆諸島に隣接する千葉県銚子のアシカ島では明治30年頃（篠崎，1956）、千葉県鴨川にあったアシカ島からは明治40年頃までにはアシカが消滅したと指摘された（西岡，1949；内藤，1975）が、同様に相模湾沿岸および東京湾に生息したアシカも明治後期までにはほとんど消滅したものと指摘できる。

これまで紹介してきた各種資料（中村，1989；1991）に基づくならば、明治30年代までは、アシカは銚子以南の房総半島洋岸から東京湾、相模湾沿岸、さらには相模灘から伊豆諸島南部にかけての暖流海域に、まだまれな存在ではなかったと思われる。しかし、それ以後急速に衰退するに至ったらしい。黒田（1953）は「1908年（明治41）頃までは神津島（同島沖合の恩馳島のことであろう。筆者註）に多数生息していたという」、おそらくは引用か聞き取りによる記録を著作の中でこのように記述している。武田（1962）によれば、三宅島の南西にある銭洲（ゼニズ）という岩礁小島で大正の中頃にも銃によるアシカ狩が行なわれたということであるから、少数は伊豆諸島に生き残った可能性はあるものの、繁殖地となっていた伊豆諸島も含めて、明治40年頃までには房総沿岸、東京湾、相模湾沿岸域からアシカはほとんど消滅するに至ったものと考えられる。

海馬（アシカ）は古来より水霊・水神としての位置づけがなされ、その殺生を忌避する民間伝承が残されている。一方、油を採るためや食用としてアシカを漁獲していた伊豆諸島は複雑であるが、そこでも殺生を忌避する本土の海馬信仰の投影が認められる（中村，1992b）。海馬は執念深く仇を討つから漁師は決して手を出さなかったと記した先の海馬嶋関係文書（石渡，1990）に見られる事例もその一つである。

近年、ニホンアシカの事実上の絶滅宣言がなされた（環境庁，1991）。伊豆諸島神津島沖の恩馳島の海馬（アシカ）は濫獲により消滅したと指摘されている（千葉，1975）。日本海の竹島の場合も明らかに濫獲された形跡が認められる（中村，1992a）。一方アシカ消滅の要因の一つとして、西岡（1949）による気候温暖化説がある。濫獲と気候の温暖化とが複合して消滅に至った可能性はないのかどうか、ニホンアシカが絶滅したとすれば、その真の原因は何であったか、さらに検討を要する問題である。

謝 辞

本稿をまとめるに当り、貴重な資料をご教示くださった慶応義塾大学生物学研究室の磯野直秀博士、和歌山県由良町誌編纂委員会の後藤宏氏、並びに朝日大学歯学部伊藤徹魯氏に衷心より御礼申し上げます。東京国立博物館資料部資料第一研究室の加藤寛氏と長岡由美子氏からは資料の閲覧にあたり多大なご理解とご協力をいただき、また古文書の解読にあたっては前回に引続き神奈川県立博物館主任学芸員の鈴木良明氏のご協力をいただいた。併せて厚く御礼申し上げます。

引用文献

青山孝慈，1973. 相模国三浦郡の村明細帳. 三浦古文化, (13): 52-76.

- 青山孝慈, 1990. 相模国三浦郡の村明細帳 (二) その五一文化・文政・天保一. 三浦古文化, (48): 51-68.
- 青山孝慈, 1991. 相模国三浦郡の村明細帳 (二) その六一文化・文政・天保(2)一. 三浦古文化, (49): 82-113.
- 葦田伊人 (編), 1962. 新編相模國風土記稿第 5 卷. 雄山閣.
- 千葉徳爾, 1975. アシカとジュゴン. 水温の研究, **19** (5): 32-36.
- 葉山禎作, 1992. 鉄砲の伝来とその波紋. 日本の近世 4, 35-106. 中央公論社.
- 石井光太郎, 1967. 弦齊の浦賀見聞記. 三浦古文化, (3): 156-161.
- 石井光太郎, 1968. 弦齊の浦賀見聞記 (二). 三浦古文化, (5): 119-124.
- 石渡 正, 1987. 久里浜の社寺と古跡. 久里浜文化叢書第二集. 久里浜地域文化振興懇話会.
- 石渡 正 (編著), 1990. 古文書に見る久里浜. 久里浜文化叢書第四集. 久里浜地域文化振興懇話会.
- 磯野直秀, 1992. 東京国立博物館蔵『博物館図譜』について. 慶応義塾大学日吉紀要自然科学, (12): 73-87.
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物一脊椎動物編. 野生生物研究センター.
- 菊地武・小林弘明・高橋恭一 (校訂), 1967. 三浦古尋録. 横須賀市図書館.
- 小島俊一, 1981. 三陸沿岸・北上山地の地名. トリョーコム.
- 黒田長禮, 1953. 日本獣類図説. 創元社.
- 宮武克巳, 1943. 臙臙獣・臘虎・海驢. 海洋の科学, **3**: 533-541.
- 本橋与氏男 (校訂・編集), 1987. 相州三浦郡東浦賀村(石井三郎兵衛家)文書第三卷. 横須賀市立図書館.
- 本橋与氏男 (校訂・編集), 1992. 近世浦賀問屋史料 (1)東浦賀書類. 横須賀市立図書館.
- 内藤靖彦, 1975. 外房のアシカ島雑記. 鯨研通信, (282): 11-12.
- 中村一恵, 1989. ニホンアシカーその分布と絶滅をめぐる. 日本の生物, **3** (12): 23-34.
- 中村一恵, 1991. 伊豆諸島に生息していたニホンアシカについて. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (20): 59-66.
- 中村一恵, 1992a. 悲劇の海獣ニホンアシカ. 海洋と生物, **14**: 185-189.
- 中村一恵, 1992b. 海馬・海・人, その1—水霊・水神としてのアシカー. ニホンアシカニュース, (3): 1-4. ニホンアシカ研究会.
- 中村幸彦・中野三敏 (校訂), 1977. 甲子夜話 1. 平凡社.
- 中村幸彦・中野三敏 (校訂), 1980. 甲子夜話続編6. 平凡社.
- 二野瓶徳夫, 1981. 明治漁業開拓史. 平凡社.
- 西岡秀雄, 1949. 寒暖の歴史. 好学社.
- 坂口一雄, 1980. 伊豆諸島民俗考. 未来社.
- 桜井 保・松本 一, 1949. 神津島記. 著者刊.
- 篠崎四郎 (編著), 1956. 銚子市史, 956-960. 銚子市史編纂委員会.
- 高橋恭一, 1972. 浦賀志録—三つの志録の解説—. 三浦古文化, (11): 109-131.
- 高橋恭一, 1973. 浦賀志録 (二) —浦賀志録上巻—. 三浦古文化, (13): 118-131.
- 武田幸有, 1962. 新島ろばなし. ふるさとをさぐる会.
- 所 莊吉, 1969. 火縄銃. 雄山閣出版.
- 内海延吉, 1960. 海鳥のなげき—漁と魚の風土記—. いさな書房.
- 柳田國男・倉田一郎, 1938. 分類漁村語彙. 民間伝承の會.

由良町教育委員会, 1987. 「海鰐島御用留帳」大引寺井家文書. 由良町の文化財, (14): 3-50. 由良町誌編集委員会, 1992. 由良町内古文書目録. 由良町.

註1・トド島およびそれに類する地名が各地に多数残されているが、そのうち海馬島や海馬 岩と書いてトド島、トド岩と呼称するのは、太平洋側では青森県以北に分布を見る。一方、本州南岸にも「海馬」の名を冠した地名が少数ながら残されている（付表参照）。例えば、静岡県御前崎沖の岩礁に付けられた「トド根」という名称がそれであり、海上保安庁刊行の日本近海海図に記載されてある。これに当る漢字は「海馬根」であろう。北海道に多く残された海馬島は確かに一部はトド (*Eumetopias jubatus*) に因むものであるが、「海馬」という語彙は本来はアシカ (*Zalophus californianus*) に当てられていたものと思われ、銚子以南の特に本州太平洋岸に残されている「海馬根」のような呼称は「トド根」と読むものであろうが、その意味するところは「アシカ根」であろう。

明治初年に出された伊豆諸島新島の漁業定書においても「海馬」が使われているが、千葉 (1975) が注釈しているように、トド (*Eumetopias jubatus*) ではなくアシカを指したものである。銚子のアシカ島の表記についても、松浦清の『甲子夜話』では海馬嶋と書いてアシカ島と読ませている（中村・中野, 1977）。和歌山県由良町沖にアシカ島の地名が残されているが、ここに生息していたアシカに関する古文書が多数残されている。由良町教育委員会 (1987) および由良町誌編集委員会 (1991) によると、海鰐嶋、海鹿嶋と書いて「あしか嶋」と読ませているが、さらに別の文書では「海馬」と書いてアシカを指している（『海馬御用筋諸事』宝永6(1709)年）。したがって、宮武 (1943) が「御前崎・伊豆七島房総方面にトドの名を付け た岩礁の在るのは過去に於いてトドの棲息した事実を語るものである」と書いているのは、おそらく「海馬」を即トド (*Eumetopias jubatus*) と解釈したことによるものであろう。

註2・『東浦賀書類』所載の宝歴5年 (1755) の関係文書（本橋, 1992）に、以下のような記述がある。

「東西浦賀村惣百姓共奉願上候儀ハ当村之内猪鹿多ク入込、新作を荒し難儀仕候二付、近日猪狩仕度奉存候此間近村二而も御料ハ御代官様、私領ハ御地頭様へ相願、玉込鉄砲打申候二付、弥以猪鹿多入込難儀仕候、依之玉込鉄砲二而打殺申度奉存候間、玉目三匁位之御鉄砲式挺拝借願上候（以下、略）。西御陣屋山二鶺鴒鳥夥敷泊り候二付、数万之鶺鴒鳥湊へ入、鯨之害罷成、伝馬数艘二而追立候得共防兼申候、依之空鉄砲二而おとし申度旨年来願罷候へ共、恐多奉存候而差旨申候、当年別而鶺鴒鳥多難決仕候二付、右空鉄砲拝借仕度旨御目付三佐衛門様迄内々二而御願申上候処、御免被成下候（以下、略）。」

三浦半島では絶滅し、現在では生息していないが、当時、浦賀周辺にはシカやイノシシが多く生息し、農作物への被害に悩まされていた。だが、それに対して鉄砲の使用が厳しく制限されていたことは、この文書から伺い知ることができる。浦賀湊へ入ってきて鯨（イナ、東京湾あたりではイナは3~6センチの大きさのボラの幼魚を指す）を食う多数の鶺鴒鳥（カワウ *Phalacrocorax carbo* であったろうか）に対しても同様であった。

註3・「アシカ牝、明治12年年5月本材木町老丁目魚商三崎友吉ヨリ買上、相模國三浦郡松輪村海浜ニテ地引網ニテ捕之」の説明書があり、写生図には各部の測定値が記入されてある。それによれば、この個体の体長（鼻端〜尾端）は4尺2寸（約126cm）である。

付表 日本近海におけるトド島・アシカ島および類似地点名一覧（中村1991を大幅に加筆・訂正*）

No.	位 置**	名 称	備 考
1.	岩手県大船渡市末崎町	海馬（トド）島	
2.	岩手県気仙郡三陸町越喜来村	鯨（トド）島	
3.	岩手県気仙郡三陸町吉浜湾	トド島	
4.	岩手県気仙郡三陸町首崎	鯨島	
5.	岩手県気仙郡三陸町千歳海岸沖	トド島	
6.	岩手県釜石市死骨崎	トド島	
7.	岩手県釜石市箱崎三貫島	トド岩	
8.	岩手県上閉伊郡大槌町	鯨須賀	
9.	岩手県下閉伊郡山田町船越	トド窟	
10.	岩手県下閉伊郡山田町船越	鯨ヶ鼻	
11.	岩手県下閉伊郡山田町大浦	トドヤ崎	
12.	岩手県宮古市姉吉	鯨登（トドノボリ）島	または鯨登岩
13.	岩手県宮古市重茂	鯨ヶ崎	
14.	岩手県宮古市重茂	鯨穴	または鯨窟
15.	岩手県宮古市重茂	鯨岩	
16.	岩手県宮古市重茂半島	トドガ崎	
17.	岩手県宮古市重茂浜	トド浜	
18.	岩手県宮古市磯鶏	鯨浜	
19.	岩手県宮古市宮古湾	鯨ヶ崎	
20.	岩手県宮古市崎山姉ヶ崎	鯨上り	
21.	岩手県下閉伊郡田野畑村	鯨ヶ崎	
22.	岩手県久慈市宇部上村	鯨岩	または鯨島
23.	青森県八戸市鮫平	鯨島	
24.	青森県上北郡六ヶ所村	鯨島	
25.	青森県下北郡東通村尻屋崎	鯨島	または海馬島、海驢島
26.	函館市函館山	トド岩	
27.	函館市榎法華村恵山岬	トド岩	
28.	新冠郡新冠町	海馬岩	
29.	釧路郡釧路町	トド岩	
30.	根室市根室半島花咲岬	トド岩	またはトド島
31.	歯舞諸島多楽島沖	海馬島	
32.	択捉島沖	トド島	
33.	択捉島沖	トド島	
34.	目梨郡知床半島	トド岩	
35.	枝幸郡枝幸町	トド島	
36.	宗谷郡猿払村浜鬼志別	トド岩	または海馬島
37.	サハリン南部	海馬（カイバ）島	別名モネロン島
38.	礼文郡礼文町	海馬島	または海驢（トド）島
39.	礼文郡礼文町	トド礁（ショウ）	
40.	増毛郡増毛郡雄冬岬	鯨島	または海馬島
41.	浜益郡浜益村	トド岩	
42.	小樽市高島岬	トド岩	
43.	古平郡古平町厚苫岬	トド岩	
44.	奥尻郡奥尻町	海馬島	
45.	松前郡松前町大島	トド岬	
46.	松前郡松前町	海馬島	
47.	青森県下北郡焼山崎	海馬（トト）島	
48.	青森県下北郡脇野村牛ノ首岬	海馬島	
49.	青森県西津軽郡深浦町	海馬島	
50.	山形県酒田市飛島御積島沖	胡貳（トド）島	

付表 (続き)

No.	位 置**	名 称	備 考
51.	山形県酒田市飛島本島西岸沖	トムの島	
52.	山形県酒田市飛島御積島	トド穴	
53.	山形県酒田市飛島館岩	トド穴	
54.	新潟県粟島	トド礁 (トドグリ)	
55.	新潟県両津市佐渡島	海驢 (トド) 島	または海驢岩
56.	石川県能登島沖	鮐礁 (トドグリ)	
57.	福井県丹生郡越前町	トド礁 (グリ)	
58.	福井県丹生郡越前町	鮐石 (トドナグリ)	
59.	京都府若狭湾	トド礁 (グリ)	
60.	京都府	トドノ店 (タナ)	
61.	島根県簸川郡大社町	等々 (トド) 島	現在の驢 (とも) 島
62.	島根県八束郡美保関町	等々 (トド) 島	現在の御前島
63.	愛媛県今治市比岐島	海獺 (アシカ) 磯	
64.	大分県北海郡部佐賀関町	海獺 (アシカ) 箸	または海獺瀬
65.	大分県津久見市高甲岩	アシカ瀬	
66.	愛媛県北宇和郡日振島	アシカ箸	
67.	宮崎県日南市	アシカ (箸?)	
68.	高知県土佐清水市稲荷崎	アシカ (箸?)	
69.	高知県土佐清水市窪津崎	アシカ岩	
70.	高知県高岡郡中土佐町加江崎	アシカ箸	
71.	徳島県海部郡牟岐町出羽島	アシカ箸	またはアシカ岩
72.	徳島県阿南市伊島町	アシカ箸	
73.	徳島県阿南市椿灘	アシカ箸	
74.	和歌山県和歌山市加太	アシカ堆 (タイ)	
75.	和歌山県日高郡由良町	海馬島	または海獺島、葦鹿島
76.	和歌山県西牟婁郡すさみ町	アシカ (箸?)	
77.	和歌山県西牟婁郡串本町潮岬	アシカ (島?)	
78.	和歌山県西牟婁郡串本町巻崎	アシカ (島?)	
79.	和歌山県東牟婁郡古座川町長島	アシカ (島?)	
80.	和歌山県東牟婁郡太地町灯明岬	アシカ島	
81.	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	アシカ (島?)	
82.	三重県志摩郡大王町	アシカ下瀬	
83.	三重県志摩郡志摩町	アシカ島	
84.	愛知県渥美郡伊良湖岬	海鹿 (アシカ) 島	
85.	静岡県浜岡町御前崎	海馬根	
86.	静岡県伊東市	海獺 (アシカ) 根	
87.	伊豆諸島大島泉津	海驢 (アシカ) 島	
88.	伊豆諸島大島波浮	海驢 (アシカ) 根	
89.	伊豆諸島式根島	海驢 (アシカ) 立鼻	
90.	伊豆諸島式根島	アシカ穴	
91.	伊豆諸島神津島	アシカ島	別名恩馳島
92.	伊豆諸島八丈島油戸	アシカ根	
93.	神奈川県三崎町城ヶ島	アシカガ入江	
94.	神奈川県横須賀市	海獺 (アシカ) 島	または海鹿島、海馬島
95.	千葉県安房郡鴨川市	海獺 (アシカ) 島	
96.	千葉県夷隅郡勝浦町	アシカ島	
97.	千葉県夷隅郡大原町	アシカ島	
98.	千葉県銚子市鹿島町	海馬島	または海鹿島、葦鹿島、海獺島

* 三陸沿岸については主として小島 (1981) を参照して加筆した。

** 太平洋側東北地方・北海道、オホーツク海、日本海、太平洋南岸の順に配列。